## 平成20年度「新たな公」によるコミュニティ創生支援モデル事業

モデル事業名	地域資源再活用型地域連携事業
対象地域	大分県玖珠郡玖珠町森地区
活動概要	森地区は人口1,807名が生活し高齢化率34.7%と、江戸時代に久留島氏が開いた城下町であり、明治・大正・昭和・平成と続く地区です。時代とともに衰退し、地域の活力がなくなりつつあります。 中世以降の史跡、町並み(街並み環境整備)や豊かな自然環境に恵まれた地区であり、大分県央に位置し農林業を中心とした産業構造で少子高齢化が進む中、城下町・日本一小さい城下町・の再生と活力を取り戻して伝統芸能・文化の伝承と農商連携の新たな枠組みと過去の伝統産業の復活による街並み再生を地域住民と共同で行う。 玖珠町が推進している、平成15年度森地区街並み環境整備事業を逐次平成25年度まで実施する中、ハード整備については順調に推移している中、今後総合的イノベーションが必要であり、地域資源の活用による交流・定住人口の拡大を図り地域活性化を行う。
今年度の主な取組	① 森地区街並みづくり協議会と協働し、地域諸団体と協力による街並みの活用による、伝統文化(日本童話祭・森祇園・森盆踊り)の活性化や人材育成による伝統芸能保存の体得を行い地域プログラムの構築と運営システムの検討を行う。 ② 観光資源化による来街者に対する、体験プログラムの作成を行い、スローリズム観光による周辺を含めたウォーキングコースやサイクリングコースを設定し周辺観光を行い、自然保護や環境保護に対する啓発を行う。 ③ 森町は口演童話作家久留島武彦翁の生誕地であり、・子供に未来を・夢を・テーマにわらべの館を中心に多くの語り部や地域の歴史を紹介する人材の高齢化は死活問題であり、観光面からも又地域伝承面からも後継者育成をプログラム化して行う。 ④ 商店街の活力を増すために、現在の・軒先市・を更に発展させ農商連携を模索し、地元の物産販売の試行を行う。 ⑤ 新たな城下町形成の中、旧来のあるべき業種の参加を検討する。例として、酒屋・豆腐屋・味噌屋・醤油屋・古着屋・古本屋・呉服屋・うどん屋・そば屋等の街並みの商店街形成を検討する。
活動結果	地域資源の活用や地域住民の地域に対するかかわりについて、各種団体及び若手等とのワーキング会議、地域資源に関するアンケートや講演会・シンポジウムの実施を通じて、特に、歴史を守る諸団体には若者が皆無であることを改めて認識し、既存の団体(会)を集約した新たな組織づくりや、各団体間のパイプ役的組織の構築と実際に行動する担い手の育成が有効な手段と考える。若者の活動できる場づくりとして、地域イベントの力を継続的に活かすために、地区でのボランティ活動の代表である「消防団組織の活用」は見逃せないと考える。各種行事に対する若者の参加状況を見てみると、消防団員が唯一の若者集団という現状がある。地域のパイプ役としての可能性がある彼等との協力体制が重要であると考える。本事業の活動を機会に、「新たな組織の見直し」と「若者が参画できる組織」の構築が必要であると考えるが、その準備段階として、本モデル事業の実施方針を検討する実行委員会やワーキング会議等の各活動を通じて、これまでの縦割りの会合を一本化できた意義は大きいと感じている。また、商工会の役割が経済面のみでなく、地域活動に貢献していると認識できた点は評価されていると考える。
当初予想していなかった効果	防災講演会での興味ある意見として、歴史資源や伝統的建造物に対する災害対策や、高齢者や弱者に対する地域住民のコミュニティが十分とられているかとの質問があった。明治時代以降2回の大火に見舞われた苦い経験があり、その教訓を生かしたまちづくりの重要性について質問があったものである。 広報活動については、各自治区に回覧文書や行政回覧文書による周知を行い、また、広く広報を行うためにマスコミ及びプレス関係の利用を図った。その波及効果として、各地区で観光面での新たな計画が持ち上がり、今後の地域連携のあり方について検討されている。町の商工観光課では総合計画の策定を検討中であり、町全体の観光振興に対するインパクトを与え、それぞれの地域での動きが芽生えることが期待できる。 事業実施にあたっては、様々な団体との協力体制が構築可能であるとの判断で始めたが、各団体にはそれぞれの目的と利害があるために、連携が容易ではない面も出ている。協力体制を広げていくための対策が必要な課題と考える。

## 実施状況(写真)



【写真】住民アンケート調査及び地域資源調査の報告会の実施

応募団体名	玖珠町商工会
リンク	http://www.kusu-shokokai.jp/
部局/担当者名	事務局長 日隈 一秀
連絡先	0973-72-1211
推薦市町村名	大分県玖珠町